

序

明年は奈良国立文化財研究所が設立されて満三十周年をむかえる。平城宮跡の発掘調査を当研究所が継続して実施するようになってからでも二十二年をこえたことになる。このように長期間にわたり事業を遂行できるのも、文化庁をはじめとする関係諸機関はもとより、地域住民の方々、さらには平城宮跡をおとずれる全国の人々のあたたかいご鞭撻、ご協力のたまものと、感謝にたえないところである。発掘調査は現在宮跡のほぼ四分の一を終了したところであるが、宮跡の全容を明らかにするにはまだ前途遠く、また内裏、一次・二次の大極殿・朝堂院の問題をはじめ、官衙遺構の究明など調査課題は山積みしている。

調査が終了した地域について、遺構のまとまりを考慮して順次報告書を作成しているが、今回の報告書をもって十冊目を数えることになった。報告書の作成は研究所の活動のなかでも最も重要なものと位置づけており、今後とも所員一同鋭意努力を傾けていきたいと考える。

今回の報告書は平城宮跡の調査によって検出された古墳時代の遺構・遺物を抽出してとりあげたものである。従来それらは奈良時代の遺構に先行するものとして、別冊でとりあつかうことはなかったが、良質で多量の遺物が出土したこともあって、今回初めて古墳時代篇の報告書を作成したしだいである。弥生時代あるいは古墳時代など平城宮跡に先行する遺構であるまとまりをもつものに関しては、今後ともこのような取扱いがなされることになろう。

国民共有の財産として、平城宮跡が将来ともに保存活用さ

れるためには、史跡整備を進める必要があり、文化庁の指導を受けながら、当研究所としても努力を傾けているところであるが、史跡整備の基本は発掘調査の成果を十分に生かすことにある。そのためにも、将来に齟齬をきたさない発掘調査をおこなっていくべく、所員一同気をひきしめてあたっていきたいと思う。

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員の先生方には日頃なにかとご指導いただいていることにあらためて感謝申し上げ、本報告書作成にさいしてご指導、ご協力いただいた各位に厚く御礼申しあげる次第である。

最後に、内容その他全般にわたって忌憚のない御批判と御鞭撻をたまわれれば幸いである。

昭和56年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足